

るゝはそも何故ぞ。

先生語り給はざるも心にひやく何物かのあるはそも何の故ぞ。先生の學識の至す所か。學識もとより必須なれども暗示の力を持ちて、人の心靈に響くものこれのみにはあらず。より大なるものこれ先生の人格なり。

育ちゆく我等の上にかゝやきて日輪の持てるが如き光と熱とを興へしものこれ先生の人格の光なり。實に先生は我等生徒の唯一の同情者なりき。教育者は眼中常に熱したる涙あり、皮下常にあたゝかき血のありたしとは、先生常に語り給ひしところなるが先生の言行や正にかくの如くなりき。即其涙や發して生徒に對する同情となり。其血や動きて言行に生命を生し以て我等を刺戟し給ひぬ。

先生の御心の動き給ふ所我等の心これに伴ひ我等のかくせんと思ふ處は先生常に之を助け給ひぬ又教場にての種々の面白き御講話は緊張したる心に和らぎを興へられ、且つ其節々に含まるゝ教への期待されずして、我等の心に深き印象を興ふるもの多かりき。

實に我等の先生に對する敬愛は子の父に對するが如き無意識的のものなりき。さるに今や其父いまさず。我等黙してやまんや。五月雨いくしほしたたる窓によりて靜かに眺むればうたゝ淋しき思ひの心の底より湧き來るを覺ゆるなり。

されどこは私情なり。先生は公の務めの爲に、多大の抱負をもちて本校を去り給ひぬ。今は我が身の事のみは言はじ彼等生徒の爲に先生の如き校長を得たるを祝ひ尙終りにのぞみて我等は先生の前途に祝福あらんとを祈るのみ。

(六月稿)

關西旅行日記

技藝科四年一同

五月十一日午後十一時新橋發の列車にて我等は今や關西旅行の途につかんとするなり。一行凡そ七十人羽織合羽等の手荷物かゝへつゝ遅れじと競ふブラットホームの混雜も又一興にしてやうやう汽車にのり込み腰を下せば思ひは早や遠く京阪の地に馳せぬ。やがて汽笛の聲と共に東都の地を離るれば又何となく都なつかしき心地もせられ來んとするのたのしさと去らんとするのなつかしさに思ひは千々にくだけて心中の混雜もまたブラットホームに劣らざりけり。

車中は我等を主として引率し給ふ藤井先生、荒井先生をはじめ理科の岩川先生、黒田ちか子先生文科の佐藤先生、下田たづ子先生會計方の富岡先生より奈良に向はせらるゝ黒田定治先生も御一所にていとぎはくしことに他人は一人もなければ心易きこと此上もなし。或は興じ或はボートレースと思ひくゝの様はなせど心は唯一すじに西の空に遊べるなるべし。

汽車は我等のたのしき思をのせて談笑の中に品川、大森をすぎゆけば窓を枕にはや夢路をたどる
 人次第にましぬ。平塚、大磯等過ぐる頃は初旅のよろこばしさも夜汽車のめづらしさに或はスケ
 ッチに或はたのしき空想にふけりし人もはやいつしか眠に入りて轟々たる車輪のひびきも知らず
 驛夫の大なる聲に眼さむればはや山北につきぬ。晝ならば美しき景色に初旅の友を驚かさんもの
 を月もなき夜の二時頃なればせん方もなし。

興津すぐる頃よりやうやう眼さむる人多くやがて右にあたりてかすかに山の姿の見ゆるに、それ
 富士ぞと誰やらの云ふに知るも知らぬも一樣に窓によりてまだ明けやらぬ空に夢の如く浮ひてそ
 れともわかぬ姿に瞳をこらしぬ。明け方ちかくなるまゝに霧たちこめたり。野も樹々の梢の見え
 わかぬほど裾野の邊靄の中なる燈火のあるかなきかに見えたるうるはしさ。富士の麓には湖水は
 あらざりしなどまだ眠のさめはてぬ友の云ふもあながち無理ならずげに霧の海とはこれをや云ふ
 らむ。

興津蒲原を過ぐる頃には早や夜は全く明けて東の空やうやく紅に富士も雪の衣ぬぎすてゝうるは
 しき其容姿をあらはしぬ。磯邊を洗ふ波の寄せて返す美しさは再び東の友を驚かしつ。西の國の
 人々は夏の休み毎にすぐる此あたりの景色のなつかしさに氣も心も軽く窓によりて説明の勞を取
 れり。

夜明の頃静岡につけば早や櫻陰會の方々の我等を迎へんとて來り給ふに知るも知らぬもゆかりあ
 る姉君達の御なさけのほどいとうれしく、やがて別れを告げて十時少し前といふに名古屋につけ
 ば此處にても櫻陰會員の歓迎にあひ關西線に乗りかへて伊勢灣にそひ南に走る。

四日市にて先きに學校を出て故郷に一日を過ごされたる伊藤氏母君に送られて一行に加はりぬ。
 程なく龜山に着きしに黒田定治先生は奈良に向はせ給ひ、我等は參宮線にうつる。今年卒業の山
 本氏其他の姉君達のいらせられしにゆる／＼と語りあふいとまもなく汽車は風を切りて走りいで
 ぬ。

午後三時過ぐる頃山田につきたれば、驛前二見館にしばしがほどいこひ、髮容等つくろひて外宮
 に參拜す。新緑もわ出でし樹間に神さびし御社を拜し奉るに遠き昔の偲ばれて尊しともありがた
 しともいふすべを知らず、唯々手打ち合せてふしをかみぬ。

鳥居前より電車にて内宮に向ふ、此地の電車の極めて悠々たるに或は興がり、或はこぼしなどさ
 わくほどにいつしか宇治につきたり。かくて左右の店の客呼ぶ聲のかしましきを聞き流して宇治
 橋を渡れば神路山の老杉森々として千歳の昔を物語れり。自ら清淨の氣にうたれつゝ五十鈴川の
 邊に至るに綠樹影を清流にやどして遠く望めば綠の水かと疑はれ、近づけば魚の木に登るの觀あ
 り。この靜なる流れに住みて世の憂きふしを知らず心のまゝに遊べる魚の心安げなるもいとあは

れにうらやまし。我等はこゝに手を清めてやがて御社を參拜す。崇嚴の極、神秘の至り、西行法師が詣でし昔の心もかくやと一種の感慨に打たれ心氣自らあたたまりぬ。一同元來し道をひきかへし繪はがきなど求めつゝ、またも電車中の人となりあたりの眺めやうやくたそがれの幕にとざれんとする頃二見につきぬ。

夜に入りて雨ふり出でしに明日を氣づかひつゝ、今宵はこゝに磯洗ふ波の音きゝつゝ、靜なる夢は結ばれぬ。

十三日 碧波靜かなる伊勢の海に偉大なる双岩ならびたち注連引き延べたる二見が浦の日の出をば夢にさへ描きしをあはれ書餅になしたる今朝の雨。とにかく此處まで來しものをとて雨を冒してたどり行けば浦邊の小路は雨具つけたる姿にうづめられ傘の下よりのぞくやうにして拜するほどに岩の大きさにふさはしきぞ意外なる。

七時十三分の發車にて二見浦に別れを告げぬ。龜山驛にて櫻蔭會員の懇切なる送迎を感謝しつゝ、奈良行に乗りうつる。雨は小やみなく降れど今は氣にもかゝらず、ゆるぐまゝにしばしまどろめば早や笠置の山も程近しといふに雨の降り込むも厭はで首さし出し行宮趾の石碑を見落さじとひしめきあひて、險阻に聳ゆる岩山を左側にのぞむ。さても偲ばるゝは建武の昔なり。

無遠慮なる汽車はひた走りに走り、行在所云々の文字を讀みき、舌讀まざりきの聲々は時のきざ

みを早めぬ。

午後一時すぎ一行は奈良の京三條の大路を歩む。此時雨は漸う々晴れんとし、右には猿澤の池のさゝなみ露を帯びたる柳樹の影をもてあそぶを見、左には興福寺五重の塔等綠樹の間に隠現するを眺めて名もなつかしき春日野に入りぬ。奈良はさびても名はさびぬ昔なからの鹿の聲。其聲未たきかざるに先ちてこなたの聲につとひ來りて馴々し。案内者の云ふ。昔より鹿の數と社の燈籠とはよく數へ得たることなしと。歩を進めて官幣大社春日神社に詣づ。丹の玉垣若むせる岩、鬱々と繁げれる老杉只繪の如く見ゆ。若宮の拜殿の欄間には後光明天皇の御宸筆と云ふ歌仙の繪畫掲げられて先づ吾等の歩を止めさす。春日本宮にては勅使奉幣の所なる直會殿の前にはるか奥には趣致に富める四つの神殿を拜す。又神樂所には白衣緋袴の巫子の奉奏する舞を見たり。嫩草山の綠草柔きをおしみて踏まで過ぎんとせし吾等は旅の靴もて先を争ふて攀ち登るあはれ知らぬ一行を見たり。

疲れを覺えて東大寺に入れば二月堂三月堂四月堂開山堂興さめて案内者の説明を他所にす。只一打の鐘の孺々とひびき渡るにしばし耳を傾けたり。

世界唯一と云はるゝ大佛殿に至りて其宏大豪壯なる念に打たれ巨大なる姿に驚かされぬ。

やがて正倉院の前をよぎりて對山樓につきしは午後五時に近かりき。黒田、下田兩先生の御姿に

接し櫻蔭會員の方々に迎へられしを喜びて奈良女高師をとふ。親しみふかき同胞はこゝゝに我等一行を迎へられぬ。うるはしく香る花もて應接室を飾り先づ我等を慰められ、新しく整頓せる教室の參觀は懇切なる説明と案内とによりていよゝ有益なり。電燈かやく頃一同講堂に集り彼我的挨拶によりますゝ暖き友情は交はされぬ。各々定められたる寮に迎へられ心と手とをつくされたる饗應に旅の疲れはあとなく愈えて時の移るをも知らざりしが、ひゞき渡る鐘に驚きて別れを告げしぞ名残惜しかりき。あゝ共に幸多く教育界の爲につくされん事を切に望む。

十四日 五月晴れの空には一點の雲だになく舊都の眺は又一しほなり。望ある一行は朝まだきに旅装も軽く曉黎の氣を浴びつゝしばし古の風物を探らんと鹿に青葉に送られつゝ、汽車に乗りて南に走る。

法隆寺驛といふにつけば早や五重塔の見ゆるもうれし。蛙の聲を耳にしつゝ畦道を急ぎてやがて法隆寺境内にかかれれば静寂の氣あたりを拂ひて自ら千古の代にかへりし心地せらる。

抑々同寺は南都七大寺の一にして聖徳太子用明天皇の勅によりて新堂を創建し給ひ、推古天皇の元年より十五年に至りて増築せられたるもの、創建當時の建造物依然として存し、太子在世中の佛體器什儼然として今に見るべきもの多く、歴史の材料美術の模範として名聲の内外に噴々たるものあり。美學一斑を學びて眼のあたり見んことを望みて止まざりし吾等は机上の評論も實地

の見學となりしうれしさに案内者の説明に一きは意を止め、或はさゝかへしつゝ就中金堂内に奉置せし古龕にして其形式は須彌山頂の喜見城による蔓草に刻める板金を以て柱桁を包み、三方の扉に形容同じき菩薩圖を書き又臺の中部には禮佛求法捨身苦行の相及び須彌山景を寫し其間に竹樹岩石を點綴せり。板金の下には碧綠にして金光を放つ玉蟲の翅を嵌入し、繪畫悉く密陀僧を以て畫けり。之等の總てに於て當時宮殿建築の密陀繪畫法彫刻法等を窺はるゝものにして且厨子は全體の權衡よく整ひ實に海内稀有の名什なりと云はるゝものなり。尙金堂内の四壁には四佛土を寫せる壁畫あり。天平時代の作品にして世界に對し誇るべき大作と見うけられ、採色に用ひられたる赤色は珊瑚を粉にして用ひたるものとか。往時の苦心の跡をも見られたり。かくて他にも幾多の寶物を拜して推古天皇時代の跡を追想するを得たり。

午後一時今朝三笠山の緑を賞したる身は今宇治川のほとりの客とはなりつ。源三位頼政の遺跡とさく扇の芝、玆堤のかたへにあり。すめりと云ふにはあらねどなぎたる池の面に影をうつして立てる鳳凰堂は元源融公の別荘なりしを御堂關白の別業となり其子宇治關白頼通公之を傳へて寺となし平等院と號せるなり。吾等は鳳凰堂内なる繪所の長者爲成の作と稱せらるゝ壁畫も見落すまじとてわざゝ内にのぼりたりしも、時代を経したためか何れも半ば脱落して明に部分を知る事能はず、一行をして嘆聲を發せしむるのみ。入口に近く墨色尙明かなる文政三年五月十日の文字

は兼ねて聞きし山陽のいたづらなりとうなづかれたり。

行く手を急ぐまゝに宇治橋を渡りも得せず、停車場前に至り暫し息ひて新茶の香に疲れも癒え心も清らに愈々桃山に向ひぬ。桃山驛より少し行きて御輦車御葬列の圖など思出の數々なる品をひさぐ店を過ぎて、つま先上りの御陵道にかゝりてよりは人々頭も上げやらす無言にて山陵に上る繁りたる木立はいと神々しうしてげに自然の靈地とは覺えたり。御陵は御工事中の事とて黒白の幕を引き廻されたり。一同は其前に恐るゝ整列して拜禮しつ。遙かに御寶穴のあたり仰ぎ奉りて云ひ知れぬ感に胸はせまり涙は頬に傳ふ。かくてある事暫し互に促がされて元來し道を下り記念すべき御陵參拜の事も終りぬ。

伏見より電車の便をかりて稻荷神社に詣で伏見街道に沿ひ、愈々京地近しときゝて疲れし身を引立てつゝ北に向ふ。東福寺に暫しいこひて洛東の紅葉の名所といふ通天橋を今は青葉ながらに溪流にてりそふ秋の紅葉を想像し、五山の一なる建仁寺は素通りして三條通りにつきあたり、西に折れて三條橋上に出でたり。北山加茂の里のあたり夕もやにかすみて薄墨の繪の如し。川邊にそひし宿の二階より早うとまねぐ人のかげを見『おいでやすおつかれやしたる』と番頭の聲にむかへられて漸くに京の人とはなりぬ。

十五日 枕に近き水音にふと眼さすれば早や京都第一の夜はあけぬ。戸を明ければ東山三十六

淡墨の如く眼前に横はり、鴨川の水聲いと爽やかなり。今日は東山めぐりに一日を過ごさんと七時過ぐる頃宿を出て下鴨に向ふ。

名もゆかしき葵橋を渡りて進むほどに兼ねて名にのみきゝてあこがれたる糺の森に入りぬ。縁深く木々の枝は道を蔽ひあたりの空氣はいとしめやかに時々、小鳥の静寂を破るのみにて森の香深く身にしみて氣いとすが／＼し。

緑の中にたてる丹の鳥居をくゞりて社に詣づ。今日は祭日にて例年なればかの名高き行列もあるべきなれど今年は夫等のことなしとか。

社前に額きて祈り捧ぐる人も二三見うけられぬ。再び元來し道を清き流れに沿ひ落葉踏みて思ひを森に残しつ此處を去る。吉田神社眞如堂を経て黒谷に詣づ、此處には熊ヶ谷堂あり直實自作の像ありとか又敦盛の塔もありき。永觀堂は見残して南禪寺に向ふ。途上誰やらの云ふ『今日は社寺詣でなり』と南禪寺は臨濟宗の本山なり。石川五右衛門のかくれたりしと云ふ山門あり、其歴史等を語りつゝインクラインを見るべくいそぎたり。生憎今日は十五日にて其運送も休止中なりければ直ちに平瀬具館に入り珍奇なる且種類多き等菟集の苦心の程も思ひやられぬ。

やがて大極殿平安神宮に詣で、そぞろ昔の歴史をくりかへしぬ。午後の日足長きに任せ一時頃より智恩院に向ふ、鶯張の廊もあり、法然上人の繪傳ありときけど又次の時と残して此處を辭す。

圓山公園八坂神社をはるかになめはるかに拜しつゝ清水寺に向ふ。左右の店の『物召しませ』の聲を後にして登りて先おどろきしは其昔辨慶がもちしとか云ふ鐵の下駄に太き金棒、辨慶に金棒ありては眞に鬼に金棒ならんと笑ひたり。海拔幾千尺なるかは定かならねど京都全市は一望の中に納め特に東西兩本願寺の屋根目立ちて著く、今來し道はあるかなかきか登り來る人は蟻かと思へ音羽の瀧近しときけど清水焼賣る店の、あさりたくて、人に先ちて降る。さゝやかなる店廣き店の差別なく興多きまゝにそこゝとのぞきあるきて終に求めしは藍手の茶碗に澁き色の達磨、誰がための家づとか犬ころに人形に湯飲み花瓶と求めし品々に會心の笑みを浮べつゝ博物館にと急ぐ。必ず見るべきものの一として擧げたることなれば閉館の時を氣づかひつゝ至り見れば未だ大方の人來らず清水焼に心奪はれての爲にや。

陳列品は東京のそれと大差なけれども、繪畫彫刻の方面にて見るべきもの多かりしは一同の心に充分の満足を與へぬ。特にこゝに記すべきは天か下庶民の涙の雨に鈍色の一しほ色あせし葱華葦の陳列中に見えたることなり。しばし去年を忍びて感慨無量、肅然と衿を正して拜し奉りぬ。それより東本願寺へ行く、勅使門と云ふ莊麗を極めし門をくゞり我も亦善男善女を氣取るにはあらねど異宗のそれも何のそのと祖先の冥福を祈る。

門前の店にては故郷なる母のためにとて珠數を求むる奇特なる子もありき。かくてたそがれ近き

頃電車にゆられ宿につく。

十六日 京滞在の第二日也。八時より拜觀を許されて御所に向ふ。吾等の心は光榮に勇みて曇りたる景色にも殆ど意を止むるものなかりき。御所は目下來秋御大典の御準備にて内外共御修理中なり。新しき木々の緑にも尙古き名殘は忍ばれて何となく貴くゆかしくぞ拜せらるる。

西の方宜秋門より進みて櫻の間虎の間より順次正面なる紫宸殿を拜す。御内部の様はうかゞひ知るを得ざれども、中央に玉座ありて其後方には即聖賢の御襖あり後の方清涼殿、紫宸殿と共に最も多く吾等が心を動すものありき。

御學問所は清く且みやびにしつらはれたる御泉水に面して建てられたり。淨く掃はれたる御苑其他萬事の御調度いづれ御質素ならざるはなく、そゝる當時の御有様を忍びまつりて恐懼に堪へざりき。

十時すぎ電車にて二條離宮に至る。此處は元徳川氏の築きし所謂二條城趾なり。結構壯大唐門を始め内部各室の裝飾いづれも精巧美麗にし、襖欄間の繪彫刻の如きは悉く古の名工の手に成りしものと云ふ。以て徳川氏當時の勢を見るに足るべし。

こゝ拜觀後一臺の電車に揺られて去ること西北三十四丁なる北野天神に向ひぬ。先社に參拜しそれより社務所に至り大廣間に席をかりて晝食をすましぬ。食後本社の寶物なる天神縁起その他

の繪卷物を拜見し大いに得る所ありき。こゝを出で平野神社の前は素通りして田圃道に沿ひて行くこと僅かに十町高野郡衣笠村にある金閣寺につきぬ。こゝは足利三代將軍義滿の營めるところ鹿苑寺と稱す。案内者に導かれて中に入れば、幽静閑雅なる庭園の様さへおかしき、ワビスケ椿、陸舟の松など見て更に寶物を拜觀し。爰を出で、又他の門を入ればこれ所謂金閣なり。林泉は依然として昔日の觀を留め、義滿の榮華のあとを語れり。節おもしろき案内者の言葉に皆々うち興じつゝ閣上にのぼれば金閣の金は既に半剝落し、わづかにその殘痕を止むるのみ。義滿公お茶の水名佳亭の南天の床柱、萩のちがひ柵等に風流なる趣味ひつゝ此處を出で、嵐山に向ふ。花もなく紅葉も見えず只一色の滴らんはがりの新緑の山、瑠璃にも似たる麓の川にかけ見せて其の夾かなる清き山水塵に染みにし身も心もげにすが／＼しうなるを覺えぬ。渡月橋渡りてしめやかなる苔の道ふみや、險しき坂路を勇を鼓してよぢのぼればこゝぞ大悲閣、平和なる京の風光只一目の中にあり。

景色に心奪はれ寫生に餘念なく、千手觀音、角倉了意の像も見ずして降りし友もあり。木の間も保津川下りの人の歌の聲かすかに、若きみどりふみわけてゆく日も暮れ近き旅心地、あはれ感興深き山なりき。

十七日 旅行もすでにこゝ一日を以て終りをつげんとす。伊勢に大神宮の壯嚴崇高なるを拜し、

奈良に春日の鹿をとひ、嫩草山の若きみどりに旅の心をなぐさめ、こゝ京の新緑に迎へられてよりすでに三日、東山めぐり西山めぐりさては御所、離宮の拜觀など身の疲れも忘れてはせめぐりぬ。尙數日も居て心のまゝ遊びたしなどならぬことくりかへしつゝ大阪に向はんとて、また夢よりさめぬ東山に別れをつげ川霧全くはれやらぬ頃三條小橋なる宿をたち出でぬ。發車は六時四十分、今日宇治伏見等に向ふべき文科の方々のこゝまで見送られたるはいとうれし。暫しの別れなれど半巾などうちふりたる、やさしき心よとほほ笑まれぬ。

七時すぎ梅田驛に着す。新橋よりは廣き様なりと初旅の友はさゝやきぬ。櫻蔭會の方々に迎へられ疲れし身を電車によせて造幣局に向ふ。車窓より眺むれば道ゆく人の様幽雅なる京都に比して何となく落付かすせわしげなる、げに土地柄なればにや是非もなし。

造幣局は淀川に面し川を隔て、大阪城をのぞみ景色いとよろし。茂れる櫻の葉蔭より見ゆる川蒸汽に東京のそれも思ひ出されてなつかし。

こゝに我等は特別に内部の參觀を許され數組にわかれ各案内者に従ふ。工場の入出は一々鍵かけて中々に嚴重なり。室内はうす暗く牢獄の如き中に只金銀のみ美しく燦としてきらめく。長一尺巾三寸厚さ二寸位の金塊價二萬圓といふ。許されて是を手を手に提げんとするに容易にあからず。我等はとても數萬圓の金持にはなれずなど笑ひぬ。かゝる金銀塊恰も煉瓦の如く積まれたり。種々の

機械を經めぐりて伸され、打ちぬかれふちとられ型つけられかくて美しき金銀貨はつくりあげらるゝなり。

つくられたるものは検査をなす自動天秤の巧妙なるに驚きつゝ、更に試験室等隈なく見て機械の力の偉大なるを賞してこゝを辭し再び埃の町を通りて大阪城へゆく。

横濱は生馬の眼をぬくといふ。大阪は何の眼をぬくにや、我等の見たるは只一部分にすぎざれども道ゆく人の様はいはずもがな、おのづからなる空氣さへ何となく騒がしく落つかず、商業の爲一刻を争ふ人の上おもひやられたり。

大阪城は時間なければとただ門前にてその偉業のあとを仰ぎ見たるのみにて直ちに歸路につく汽車まつ間を驛前の茶店に憩ふ。寸暇をぬすみて名物菓おこしに大きな手荷物つくりし人も多く見うけられぬ。かくて十數分にして再び車中の人となり、この煤烟の都を後にして竹やぶのみうちづゝける左右の平和なる景色ながめつゝゆく。京都に近づきし頃東寺の塔の美しく車窓より見えたるに名殘のスケッチせんと思ふ手帖とり出す友もありき。

明朝は早學校に歸ると思ふ嬉しさと思ふ旅の終る残り惜しさに皆々元氣を出し窓より首さし出して後に消えゆく山々の景色あかず眺めぬ。

逢阪山の隧道すぐればやがて琵琶湖見えそめぬ。富士山と琵琶湖とはこの旅行に於て東北の人こ

のかねて樂しみとせる所、湖見えしときくや皆々窓によりぬ。八景はいづこ、比良の山はいづれか、あの松原こそ粟津ならんなど車中一時にかしましくなりぬ。瀬田の長橋は明に見えたれども石山はたゞその方角を指し示されたるのみなるに、我等はたゞ茂れる森の向ふに見えもせぬ古き寺の様心に描きてすぎぬ。

彦根すぎ米原すぎ關ヶ原もいつの間にか通りすぎて、大垣にて辨當柿羊羹など求むる聲はすでに夢の中にきゝしといふ友もありき。

岐阜にて櫻蔭會員の方より菓物あまた戴きしに、誰が發起にや菓物入れし大きな籠車中につきさげその中に夏みかんお菓子さてはお辨當など數々の兵糧あまた入れたる、汽車のゆるゝ毎に窓をうつに皆々うち興じぬ。

名古屋をすぐる頃すでに夢路をたどるもの數多く、月清く波白き墨繪の如き濱名湖の景色見おとしたる人は二三人には止らざりし。

先生とりかこみて面白き話に餘念なかりし一團も一時過ぎ二時となれば窓に眩掛に頭もたせて、只きこゆるものは車の轟々たる響のみ。

窓によせし眩の痛さに眼さむればすでに箱根にさしかゝりぬ。東天すでに白みさらでだに美しき景色は谷よりのぼる朝もやにうす絹被りたるが如く、ゑもいはれぬ眺めに友をゆりおこせば、驚

き眼をさまして、折柄隧道に入りしともしらで眞暗闇の中に頭出し、いづれが箱根まだ暗きになどつぶやくにをかしくて人の眼さすまでに笑ひぬ。かくて國府津大磯も談笑の中にすぎ品川の朝景色に迎へられ新橋につきしは十八日午前七時二十分黒田先生のお迎へをうけ一同無事歸校したり。

會報

大正二年六月七日 第二十四回技藝科學術談話會を開く其概況は

一、開會の辭

宮川先生

一、パンに就て

技二 武藤保

一、孝道に就て

谷口先生

一、石鹼手製に關する實驗談

技三 渡壁幾子

一、吾等日常食料品の營養量及び價格

技四 荒木ツエ

校長先生を始め諸先生方の御來會あり。谷口先生の御講演は日本の國民性を明確に意識せしむるに足るものにて聽者の満足一方ならざりき。終りに部長より各研究者に對して讚辭ありたり。

會員諸姉に告ぐ

本會々計整理上必要有之候間本年度及之迄に滞りし會費を宮川孝久先生宛に早速御送附相成度候尚贊助員各位にして家事裁縫等技藝科に特有の學科目につきて御卒業後の實地御教授の御經驗或は御研究等御心おさなく奮つて御寄稿相成度願上候。

會費領收廣告 (大正二年三月以降)

一金壹圓貳拾錢也	()	平	松	啓
一金壹圓貳拾錢也	(四十四年度分)	大	塚	ひ
	(四十五年)	和	田	弟
一金六拾錢也	(大正二年度分)			

本年度役員の變動左の如し。

部長 宮川 教授
委員

編輯係 尾崎キミ、丸野テル(四年) 吉田キク(三年) 庶務係 荒木ツエ(四年) 荒川イト(三年) 小村コスエ(二年) 松本サト(一年) 河野のぶ